

神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ

－後期初頭期 称名寺式土器文化期の様相 その2 土器編年試案－ 縄文時代研究プロジェクトチーム

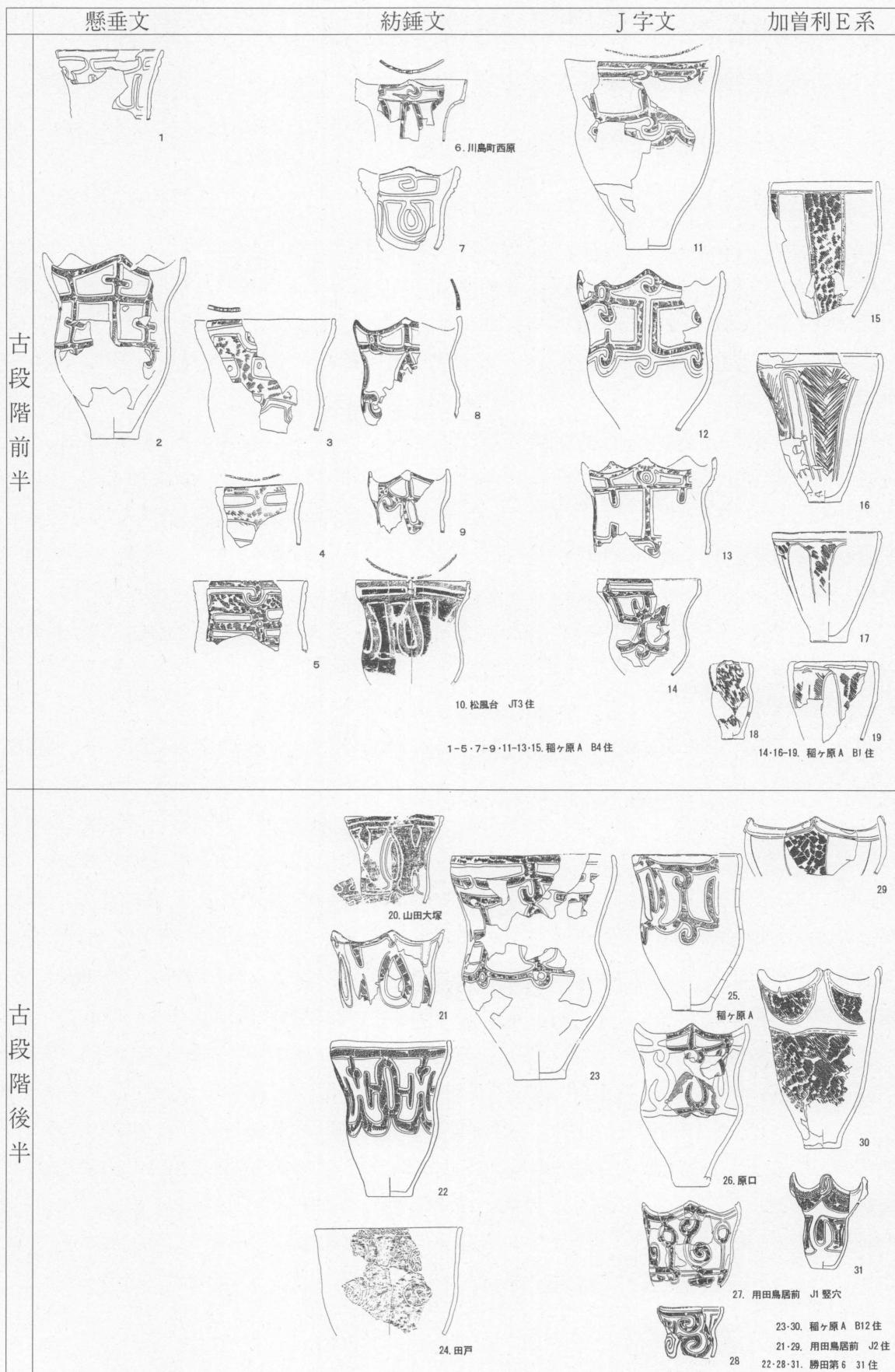
I. はじめに

今回の検討は、平成17年度から開始した後期初頭期・称名寺式土器文化期の様相をめぐる研究の2年次目にあたる。前回は報告書などの文献から当該遺跡に関する情報を抽出し、170を越える遺跡のデーターベースの作成後、「主要遺跡の集成及び重複・一括出土事例」の検討を実施した。今回はその情報に基づき主要な遺跡から選択した土器の比較・検討を行い「土器編年試案」を提示するに至った。しかし今回取り扱う後期初頭称名寺式土器は、他の土器型式に比して時間幅が短い傾向が想定され、それを反映しているためか調査事例は増加する傾向にあるが、該期の遺構や遺物出土の好例に恵まれない現状がある。また対象とした資料は神奈川県内の出土資料のみと限定したことから在地土器と異系統土器との関係など地域的な傾向を捉えにくい側面もあり注意を要する。これら条件的な制約の中で、先学の研究成果の蓄積を踏まえた上で可能な限り時間軸確立の可能性とその課題を見いだすことを前提に今回の分析を進めてきた。将来的には新たな出土資料の蓄積により研究成果がさらに進展する可能性も含まれるものである。今後はこの編年試案に基づき、竪穴住居址・住居以外の遺構・集落構造・遺跡分布及び土器以外の遺物に関する研究を実施していく計画である。

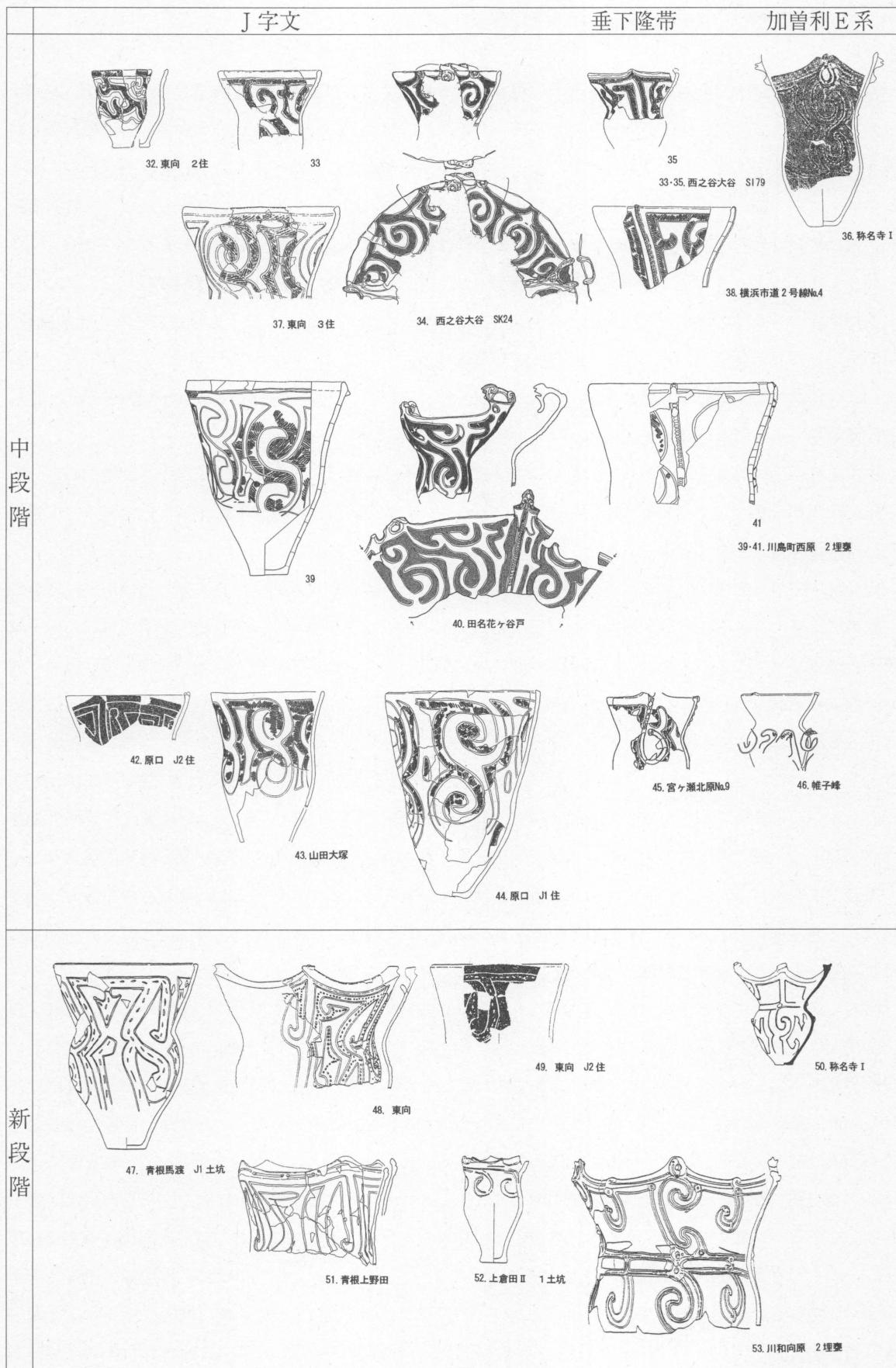
II. 研究略史

近年までの研究を簡単に振り返りたい。称名寺式土器は、吉田格氏により1951年に発掘調査された横浜市金沢区所在の称名寺貝塚出土土器を標式とする資料である。1957年には第二次調査を実施しその内容を補完し、1960年に発掘調査報告（吉田 1960）を刊行しその成果をまとめている。報文では、称名寺A貝塚の「第一群」とした加曾利E式から後続するものと、称名寺B貝塚の「第二群」とした堀之内式へ続くものを称名寺式土器として型式提唱された。その後1970年代中葉以降、出土資料の増加と前後の型式とくに中期後葉加曾利E式土器の編年確立などにより後期初頭土器に関する研究（下村1973・1974、青木1977）など多くの論攷が相次いで発表され、「称名寺式土器の研究」（今村1977）に代表されるよう型式としての位置づけが確立しその研究が大きく進展した。1985年には港北ニュータウン埋蔵文化財調査団により、「称名寺式土器に関する交流研究会」が開催されたことも画期であり、その成果はその後の研究の進展に大きな弾みを与えるものとなっている。内容は「称名寺式土器に関する交流研究会の記録」（石井ほか1990）として詳細に刊行されている。1992年には「称名寺式土器の分類と変遷」（石井1992）が発表された。その論攷は、称名寺式土器を3大別し、7細別の段階区分案を詳細に提示するもので、その出現・中津式土器群と在地土器群の融合・独自型式としての安定・前後型式との関係など多岐にわたる課題を体系的に整理するものであった。今回の編年試案作成にあたり大いに参考にした。1990年代では称名寺式土器と中津式土器の文様要素の詳細な検討から表現形態の差異を見いだす研究（鈴木1995）など、前後の型式または地域間での比較・検討などの研究が行われている。

(天野賢一)



第1図 神奈川県における称名寺式土器編年案 古段階 (S=1/15)



第2図 神奈川県における称名寺式土器編年案 中・新段階 (S=1/15)

III. 神奈川における称名寺式土器編年案

古段階（第1・3図）

古段階は、西日本との相互影響のもと磨消縄文による帶縄文土器が成立する段階である。文様は、窓枠状区画を主とする口縁部文様帯と方形区画を基調とした胴部文様帯からなる。胴部の主文様として懸垂文や紡錘文、小型のJ字文があり、これらが太く深い特徴的な沈線で区画された帶縄文により描き出される。縄文は中期末に比べ細かく、器面調整も前段に認められた研磨単位の明瞭な光沢をもつ磨きではなく、研磨痕跡が不明瞭で鈍い光沢をもつものが多い。これらの特徴は西日本の中期末土器（北白川C式もしくは平式）にその祖形が求められ併行する中津式の成立と連動している（今村1997、石井1992、鈴木1993など）。これらの文様構成からなる土器に波状口縁および平縁深鉢があり、加えて、細かな縄文を縦位に施した粗製深鉢、中期末の土器の伝統を引き継ぐ加曾利E系土器が共伴する。

※古段階の第1・3図は横に主文様の類型・系列を配したが、前後半の区分以外、資料の上下は変遷を示すものではない。

古段階前半（第1図1～19・第3図1～18）

古段階前半は関西地方に分布の中心をもつ中津式の影響を強く受け、称名寺式が成立する段階である。本段階の代表的資料として稻ヶ原A地点B-1号住居址、B-4号住居址、松風台遺跡JT-3号住居址、下鶴間長堀遺跡1号住居址などがある。

口縁部文様帯に窓枠状区画を有するものが主体であり、西日本中期末（北白川C式もしくは平式）の影響が確認できる。第1図6の川島町西原遺跡遺構外出土例、10の松風台遺跡JT-3号住居址、13・14の稻ヶ原遺跡A地点B-1号住居址などでは口縁部文様帯直下の屈曲が強く、関西地方中期末葉の影響をより色濃く残す。同様の系譜は、口唇部に施される刻みにも看取される（第1図3・4・6・8・10・11など）。波頂部を中心に懸垂文をもつもの（第1図1・2・4・8～10・14など）、小さなJ字文をもつもの（第1図3・5～7・11・12など）、円文をもつもの（第1図13など）がある（波頂部は4もしくは5単位）。窓枠状区画からなる口縁部文様帯のほかに、口縁部直下に一段の帶状文をもつもの（第3図10）、口縁部直下が無文帯となりその下に一段の帶縄文をもつもの（第3図7・8）がある。前者は先の窓枠状区画と同様、西日本にその系譜が求められるが、口縁部直下の無文帯は在地の加曾利E系土器から取り入れられたものであろう（今村前掲、鈴木前掲）。この口縁部直下の無文帯はこののち古段階後半以降主体化していくものであり、すでに古段階前半で加曾利E系土器との融合が認められることに本段階を設定した意味がある。

胴部文様帯は上下端を区画する帶縄文とこれを縦位に連結する懸垂文や紡錘文、J字文からなる方形区画を基調とする。主文様としての懸垂文、紡錘文および比較的小さなJ字文が、波状口縁土器の波頂部および波底部に配される。これらの主文様に古段階後半に盛んとなる横位の突出は未だ顕著ではない。本段階はこれらの主文様から構成され、主文様の間隔が広いため、無文部が多くを占めこととなる。胴部文様帯の下端が胴部の最大径付近にあることも本段階の特徴である。第1図、第3図に帶縄文からなる一群を胴部における主文様別に配した（図の上下は変遷を表さない）。いずれも、口縁部文様帯と胴部文様帯の縦位区画が一致している。胴部文様帯の区画もしくは波頂下に懸垂文を配し、その中间もしくは波底部に懸垂文や紡錘文、J字文を有するもの（第1図1～5・第3図1・2）、同じく紡錘文を主文様に、波底部に懸垂文やJ字文を配するもの（第1図6～10・第3図3～7）、J字文を主文様とし、その間に紡錘文やJ字文を配するもの（第1図11～14・第3図9～13）がある。ただし、口縁部文様帯の波頂部に施された主文様が円文（第1図13・第3図2・3）やJ字文（第1図3・5・6）であるというように、胴部文様帯の主文様と対

応しない場合もある。

一方で、平縁のものに波状口縁には認められない特徴がある。平縁土器において懸垂文を胴部文様帶の主文様とするものは、帯縄文の幅が広く、無文部とほぼ均等（第1図3・4）もしくは無文部が狭くなる（第1図5）。これらは本段階特有のものであり、のちに続くことはない。また、古段階後半に主体的となる横位連結のJ字文がこの段階から認められる（中段連結J字文、石井1992のB群）。第1図14は口縁部文様帶の窓枠状区画直下に段をもつ古手の器形を呈し、胴部文様帶における窓枠状区画直下の主文様を紡錘文とし、その間に縦位に連なるJ字文を配している。この上位J字文の下端で横に帯縄文が配され紡錘文に連結する。類例として第3図12がある。本段階は上位のJ字文が下位のものより大柄に描かれる。

上記の文様構成をもつもののほかに、縦位に施された縄文をもつ粗製土器もある。第3図14、15はそれぞれ稻ヶ原遺跡A地点B-4号住居址、松風台JT-3号住居址から上記中津式の影響を強く受けた土器と共に出土している。14は口縁部に横走する二条の沈線を有し、その直下に縦位に施された縄文を配し、15は口縁部文様帶をもたず縦位の縄文のみをもつ。両者とも口唇部に刻みをもち西日本との関連を伺わせる。14の口縁部文様帶の創出や縄文が細かいことも同様である。後半段階と異なり、縦位に施された縄文はまばらで単位文様化している。また、加曽利E式第IV段階の特徴をそのまま受け継ぐ加曽利E系土器も共伴する（第1図15～19・第3図16～18、縄文時代研究プロジェクト2002）。第1図15および第3図17は口縁部直下の無文帶をはさんで横位の断面三角の微隆起線をめぐらす。胴部は垂下隆帶間に幅広の縄文帶を残すもの（第1図15）、逆U字文を有するもの（第1図17・19・第3図16・17）があり、前段の加曽利E式第IV段階との区別は難しい。ただし、第3図16のように口縁部文様帶が有段となり幅広沈線による窓枠状区画をもち、胴部に加曽利E式第IV段階の文様を施す事例は、加曽利E式に中津式の要素を取り入れたものといえる。（阿部友寿）

古段階後半（第1図20～31、第3図19～38）

本段階は、前段階で顕著であった口縁部の窓枠状区画の崩壊と段の喪失が認められる段階である。また、モチーフとしてJ字文が顕著に現れ始めるのもこの段階である。前段階から見られる主文様の間隙を懸垂文などの副文様で埋める余白処理の傾向は顕著なものとなる。胴部文様帶の下端区画は、胴部最大径付近にあるが、最下端が胴部最大径付近より下がるものも少数であるが認められる。

第3図19～21は懸垂文が施される一群である。口縁部形態は、波状口縁と平縁が存在する。口縁部には帯縄文が巡るが前段階で顕著であった窓枠状区画の崩壊が認められる。19は波状口縁の波頂部下から懸垂文が胴部文様帶の下端区画まで垂下し、胴部文様帶中央部分からは横位に区画するかたちで帯縄文が巡り、波状口縁の波底部下付近には、渦巻文が施されている。21は口縁部に巡る帯縄文が沈線による連弧文で区画され、一見、窓枠状区画のようにも見えるが加曽利E系土器の影響によるものと考えられる。

第1図20～22、第3図22～24は紡錘文が施される一群である。第1図21は波状口縁に巡る帯縄文の波頂部からJ字文を意識したかのような小さな帯縄文の突出が認められ、その下には主文様として紡錘文が施される。主文様間には上下から剣先状の懸垂文が副文様として施文される。第3図22は同じく波状口縁に巡る帯縄文の波頂部から小さなJ字文が施されている。その下には第1図21とは逆に懸垂文が主文様として施文され、主文様間には紡錘文が副文様として施文されている。平縁の土器は、主文様である紡錘文間に副文様の剣先状の懸垂文が施されるもの（第1図20）、主文様の紡錘文の中央付近から横位に帯縄文が突出し、主文様間をスペード状の懸垂文が副文様として施文されるもの（第1図22）などがある。

第1図23・24、第3図25・26は紡錘文とJ字文が施される一群である。第1図23は口縁部に2段の帯縄文

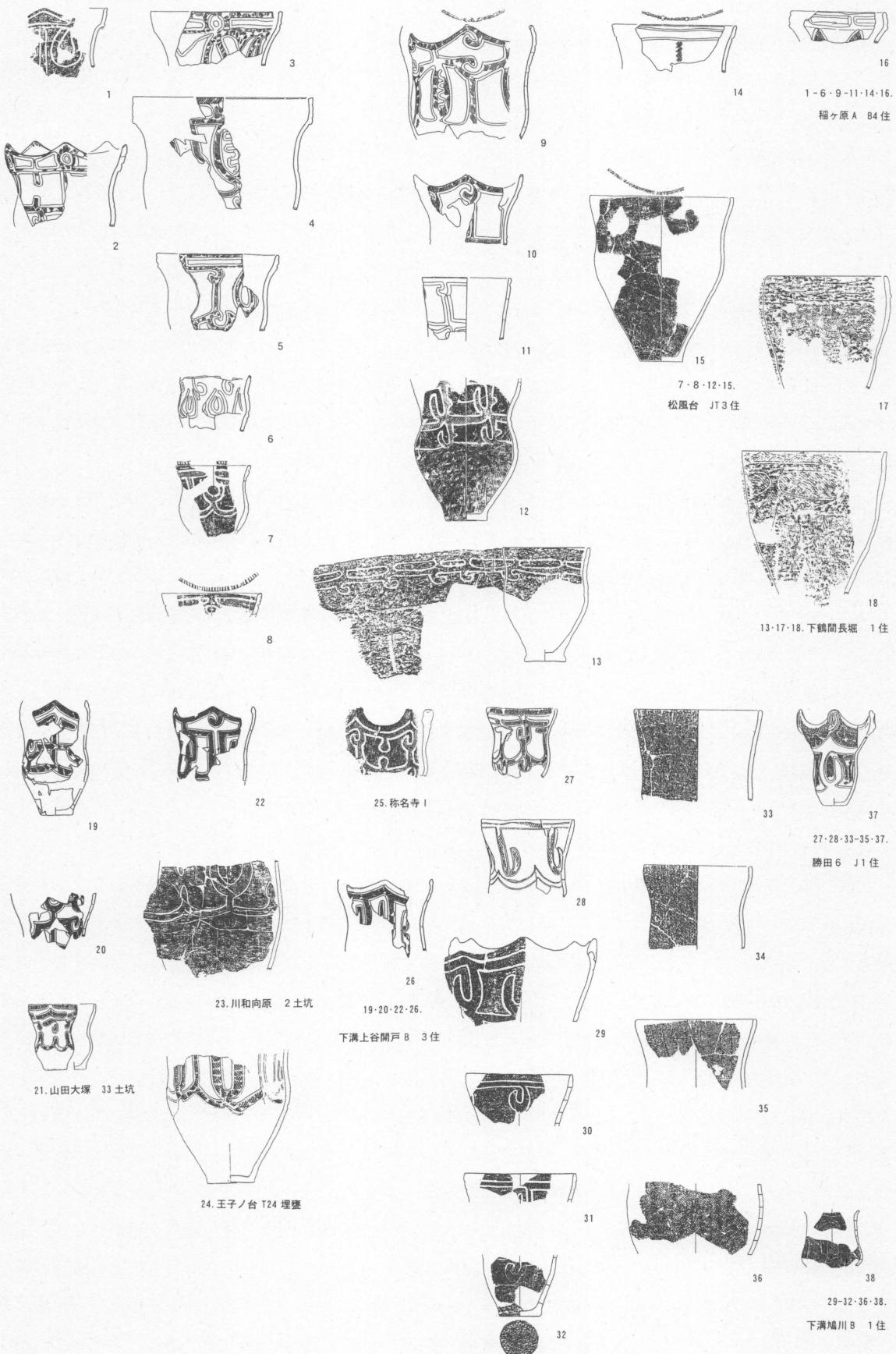
と懸垂文が施され、窓枠状の長方形区画が描出されているが、下段の帯縄文の一部が切れているため窓枠状区画は崩壊している。懸垂文直下には、主文様としてJ字文と紡錘文が施されている。主文様間には2段の長方形区画の帯縄文とこれらを連結する懸垂文が副文様として施文されている。胴部文様帶下端区画の主文様と副文様直下には、小さな紡錘文が施されている。口縁部の懸垂文と副文様、胴部下端区画の帯縄文内には、円形の列点が施されている。第3図25は波状口縁波頂部の帯縄文よりJ字文が施され、その下より懸垂文が胴部文様帶下端区画まで垂下する。波底部には副文様として小さな紡錘文が上下に施される。第3図26も波状口縁波頂部の縄文帶よりJ字文が施される。このJ字文は、紡錘文が施される一群で見られたような縦長の紡錘文の上端の一部が途切れることにより変化したJ字文であると考えられる。波底部の副文様にも同様のJ字文が施文されている。

第1図25～28、第3図27～32はJ字文が主文様として施される一群である。第1図25は口縁部に連弧文による無文帯を施し、その直下に帯縄文が巡る。主文様として連弧文中央直下の帯縄文より小さなJ字文が発生し、更に懸垂文が胴部文様帶下端区画まで垂下する。下端区画の主文様直下には小さなJ字文が施文されている。主文様間には、縦長の紡錘文から変化と思われる大きなJ字文が副文様として施文されている。第1図26は口縁部に窓枠状区画を有している。波頂部から懸垂文が施され、懸垂文直下には小さなJ字文が施文される。更にその下に大きなJ字文が施文される2段構成のモチーフとなっている。波底部直下にも2段構成のJ字文が副文様として施される。第1図27は口縁部に巡る帯縄文の波頂部からJ字文が施され、さらにJ字文下部より逆方向のJ字文が施されている。波底部直下には副文様として紡錘文とそこから懸垂文が施されている。胴部文様帶の下端区画は維持されているが、最下端が胴部最大径より下に位置している。第1図28は胴部に2段構成のJ字文が施される。上段のJ字は縄文充填されているのに対し下段のJ字は無施文といったネガポジの構成となっている。これら第1図26～28の土器は、中段階の縦位2段構成をとるJ字文をモチーフとしてもつ土器の一群へと繋がる資料であると考えられる（28については、中階段に下る可能性もあるが、同一遺構出土であるためここにおいた）。第3図27は口縁部に2段の帯縄文と懸垂文が施され、窓枠状の長方形区画が描出されているが、下段の帯縄文の一部が切れているため窓枠状区画は崩壊している。口縁部の懸垂文直下には、主文様としてJ字文が描かれ、J字文の下部からは懸垂文が胴部文様帶下端区画まで垂下する。主文様間には下端区画から上部に向けてT字状の懸垂文が施文される。下端区画の主文様・副文様直下には、小さなJ字文が施文されることにより、胴部文様帶の最下端が胴部最大径より下に位置している。第3図28～31はいずれも口縁部に帯縄文が巡り、そこから派生したJ字文、または逆J字文（28）が施される。J字文は胴部文様帶下端区画に連結するもの（29）連結しないもの（30）などがある。

第3図33～36は粗製の深鉢形土器である。地文に縄文が施されている。

第1図29～31、第3図37・38は加曽利E系土器である。第1図29は沈線を平行に垂下させており、沈線で区画した中を無施文とし、無施文間に縄文を充填した土器である。この平行垂下文類型は、ほとんど形態変化をみせずに称名寺式後半段階まで継続する。第1図30は胴部文様帶2帯化構成をとる土器である。上部のU字文は矩形化し、胴部中央部に無文帯を形成する。第1図31も胴部文様帶2帯化構成をとる土器である。波頂部にU字文の接点を持ち、胴部中央に無文帯を形成する。胴部無文帯から下部文様帶に無文帯の逆J字文が施される。これら加曽利E系内部で発生した胴部文様帶2帯化構成が、2段構成J字文の称名寺式を成立させる要因になったと考えられる。

（岡 稔）



第3図 称名寺式土器 古段階補足図 (S=1/15)

中段階（第2図32～46、第4図）

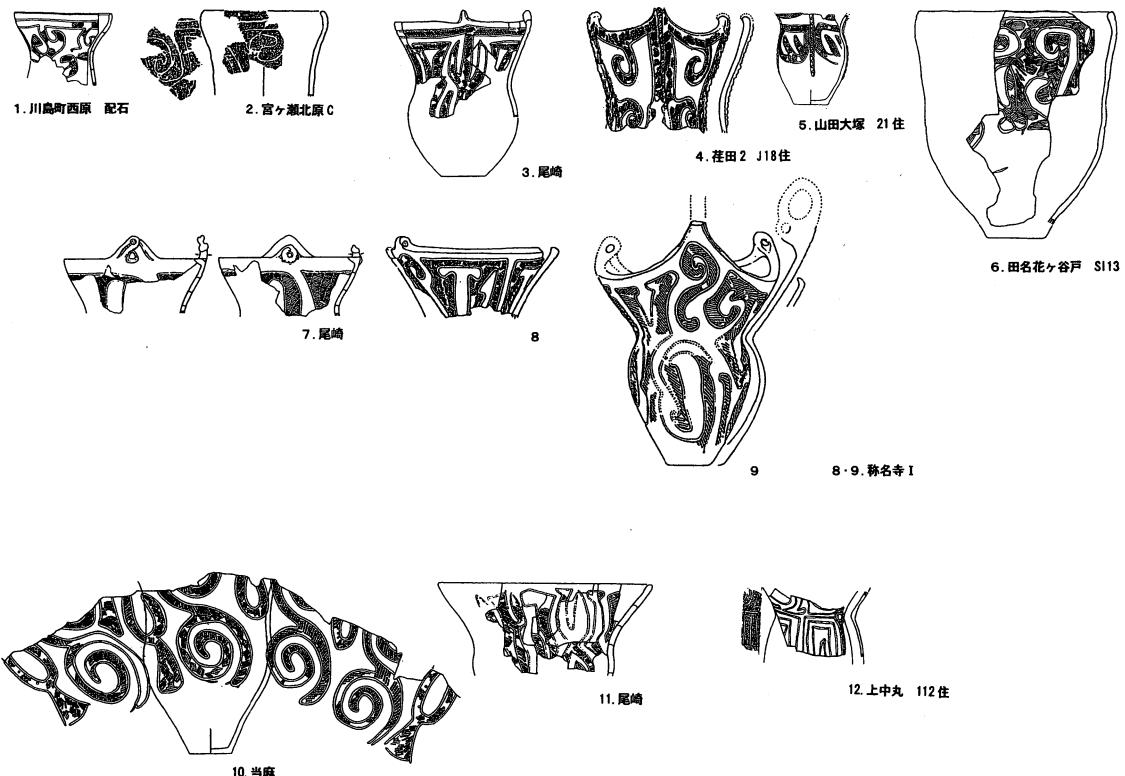
古段階後半において進行した西日本の土器群と在地系土器群との融合は、縦位2段J字文や垂下降帶等、あらたな要素を有する土器類型の成立を促したとされている。これらの縦位構成をとる土器群が確立し、組成の主体を占める段階を中段階とする。

本段階の県内出土資料は、古段階後半に成立し、以後、称名寺式を通しての基本モチーフとなる縦位2段構成をとるJ字文が施された深鉢を主体とする。縄文・条線のみが施された粗製土器や、横浜市称名寺I貝塚出土資料（第2図36）、相模原市田名花ヶ谷遺跡SI13出土資料（第4図6）のような加曾利E系と呼称される中期末の伝統を受け継ぐ在地色の強い土器群の他、浅鉢や注口土器等も存在するようであるが、県内遺跡ではこれらの良好な伴出事例に恵まれていないため変遷図に多くを反映することはできなかった。

深鉢では平縁のものが主体となるが、波状口縁を呈するもの（第2図36、第4図4・9）や小突起を有するもの（第2図35・45、第4図3・8）の他、田名花ヶ谷遺跡出土資料（第2図40）のように、1・2単位の大形把手が付されるものも存在する。また、本段階の資料では、古段階でみられた口唇部の加飾は認められなくなるようである。

口縁部文様帶は、中井町東向遺跡2号住居址出土資料（第2図32）、同3号住居址出土資料（第2図37）、横浜市西之谷大谷遺跡SI79出土の伴出資料（第2図33・35）、横浜市川島町西原遺跡2号埋甕の伴出資料（第2図39・41）、横浜市荏田第2遺跡J18号住居址出土資料（第4図4）に代表されるように、古段階の特徴のひとつでもあった段・窓枠状区画が衰退し、帶縄文や横位沈線・微隆起線で区画された無文帶に置き換わる。このような動きは古段階において既に散見されるものであり、上記の資料は本段階の中でも古相のものとして捉えられよう（32は沈線が太いなどの特徴からより古い可能性もある）。これに対し、田名花ヶ谷遺跡出土資料（第2図40）、横浜市山田大塚遺跡出土資料（第2図43）、平塚市原口遺跡J1号住居址出土資料（第2図44）、山北町尾崎遺跡出土資料（第4図7）に代表されるように、口唇部直下の帶縄文、あるいは口縁部無文帶の下端区画をなしていた横位沈線・微隆起線を喪失し、各モチーフの横位への連繋が寸断された資料は本段階の典型とも言えるもので、やや後出の資料として捉えられる。

胴部文様帶に採用されている主文様（モチーフ）は、細い沈線で描出された縦位2段構成のJ字文・渦巻文が主体となり、古段階にみられるようなバラエティーは認められない。古段階後半以降、主文様の間隙を懸垂文等の副文様で埋める余白処理の傾向が強まるが、本段階ではそれに拍車がかかる。西之谷大谷遺跡SI79出土の伴出資料（第2図33・35）、横浜市高速2号線No.4遺跡出土資料（第2図38）のように、主文様の間隙に配された懸垂文を横方向に突出させる古段階にみられた手法で余白部分との均衡をはかるものもあるが、西之谷大谷遺跡SK24出土資料（第2図34）、東向遺跡3号住居址出土資料（第2図37）、田名花ヶ谷遺跡出土資料（第2図40）、山田大塚遺跡出土資料（第2図43）、相模原市当麻遺跡出土資料（第4図10）のように、多くは主モチーフとその間隙の形状に合わせた懸垂文を一定幅で描出することによって施文部（帶縄文部）と余白部の比率を拮抗させている。また、先述した各モチーフの横位への連繋が寸断された資料（第2図40・43・44、第4図9等）では、古相とした資料の余白に相当する部分に縄文充填が行われる施文の反転現象が認められるが、このような現象は在地系土器群の影響を受けて生成されたものとして理解されている。第2図34・35・38・40・41・45、第4図4・5・8のように、主に隆帶によって縦位区画を施す垂下降帶類型（石井1992）と呼ばれる資料は、本段階を中心に組成する特徴的な類型である。荏田第2遺跡J18号住居址出土資料（第4図4）は最古相の資料として理解されているものであり、その成立についても在



第4図 称名寺式土器 中段階補足図 (S=1/15)

地系土器群との関わりの中で説明されている。

本段階においては、古段階後半からみられる胴部文様帶（施文範囲）の縦位拡張傾向がさらに進行し、文様帶の下端部が胴部最大径のかなり下方まで下りてくる。これによって重畠するJ字文の大きさの均等化がはかられ、モチーフ全体（2段J字文）の大柄化が顕著となる。第2図32・36・39のように、モチーフを横位に連繋する胴部文様帶の下端区画が維持されたものは、古段階以来の伝統を保持した古相の資料として認識されるが、本段階の主体を占めるのは、第2図40・43・44、第4図9・10のように区画を喪失したものである。下端区画を喪失した資料の中には、原口遺跡J1号住居址出土資料（第2図44）のように、下段モチーフ自体の下端部も開放しているものが存在する。このような文様帶・モチーフの下端開放の傾向は、新段階へ繋がる顕著な動きとして捉えられるもののひとつである。文様帶・モチーフの下端開放傾向とともに、中段階から新段階へと引き継がれていく傾向として、2段J字文の整然とした縦位構成やモチーフ自体の崩れという点を指摘することができる。田名花ヶ谷遺跡出土資料（第2図40）のようにモチーフが斜方向に流れたり、横浜市帷子峯遺跡出土資料（第2図46）、称名寺I貝塚出土資料（第4図8）、相模原市上中丸遺跡112号住居址出土資料（第4図12）のように胴部文様帶が2帯構成をとるもののがそれである。また、量的には多くはないが、原口遺跡J2号住居址出土資料（第2図42）、称名寺I貝塚出土資料（第4図8）のように、新段階では安定的なモチーフとなる縦位・斜位の直線を基調とした鉤状のJ字文やR字状文が配された資料が散見されるようになる。

（井辺一徳）

新段階（第2図47～53、第5図）

主に列点や沈線文で文様を構成する段階を新段階とする。

文様の描出は、前段階までの沈線と充填縄文から、沈線と列点充填、または沈線のみに変わる（注）。文様は前段階の2段J字文の流れを基本的に汲むと思われるものが大多数であるが、J字文に直線的な辺が採用され、下段J字文の下端が途切れたものが圧倒的主体をなすようになる。時間的に前半・後半に大きく分けることができる。

新段階前半は2条の平行する沈線で文様を描き、沈線間の列点充填が盛行する。口唇部は直立するもの（第2図47）と、くの字状に内折するもの（第2図48）がある。口縁には平縁（第2図47）と波状縁（第2図48）があり、波状口縁の波頂部の頂上に突起がつくことが多い。器形は胴部中位で強めにくびれる深鉢（第2図47・48）が一般的で、くびれ部がちょうど2段J字文の中間点に相当しているものが多い。文様はJ字文が直線的な辺で構成され、2段J字文が全体で菱形状をなすものもしばしば見られる。J字文同士の間には、J字文に平行するように列点を充填した平行する沈線を配したり、銛先状文を垂下させたりし、それぞれの文様は上端が直線で連結されている。銛先状文の逆刺部両脇や下端J字文の先端の無文部分を中心に所謂R字状文が生成するが（第2図47）、2段J字文の下端は途切れ、開放する傾向があるため、R字状文が独立した文様として分離するもの（第2図47）もある。また新段階の前半か後半か明確に位置づけができるないが、J字文が1段のもの（第2図49）がある。第2図49は口縁下には列点を入れた沈線文を横位に巡らし、その下端沈線から分岐した沈線で1段のJ字文を描いているが、J字文の先端には本段階特有の鈎状の文様が描かれている。また胴部中位が強くくびれ、胴部下位が膨らむ器形をなし、くびれ部を境に上下で文様を異にするものもある（第2図50）。この段階純粋の一括出土事例はないが、原口遺跡J1号敷石住居址出土土器中の列点文土器群（第5図8～11）は以下に述べる後半段階の土器を含まないため、時間的に後半のものと画することができると思われる。充填縄文がどの程度残存するかはよくわからない。

新段階後半は文様描出沈線が3条程度になるものが出現する段階である。また口唇部が内折するものでは口唇部に穴と沈線を巡らしたものが現れる（第2図51）。この口唇部沈線は次の堀之内1式土器に引き継がれるが、本段階では沈線が途中で途切れ、口縁部を全周しないものがほとんどであることが異なっている。2段J字文をもつものでは主文様であるJ字文と主文様間の文様が平行しながら接近して描かれ、かつ列点文をもつものが少ないとから、3条の沈線で文様を描くようなもの（第2図51）が現れたり、2条の描出沈線間隔の幅広化傾向が見られる土器がある。2段J字文構成の崩壊もかなり進む。3条沈線文の登場で、口縁部下やや下がった所に横位1条の沈線が巡り、J字文の上端横位沈線と平行するもの（第5図35・36）が現れる。またJ字文が1段のものも出現する（第5図36）。このJ字文が崩れたものが単位文として横位に連続的に配されたり、沈線文間隔が更に広くなったり（第5図35）、口縁下の横位沈線が2重化したりして次期の西関東の堀之内1式土器に変容していくと考えられる。1段J字文が間隔をあけて懸垂した土器も口縁下の横位沈線がやや下がったものなどは本段階に位置づけられるかもしれない（第2図52）。またこの他隆線による文様を描いたものもある。第2図53は隆線と沈線で文様を描くものであるが、沈線文に3条沈線が存在するため、ここに置いた。隆線文では隆線文様の先端や分岐基点に円形の貼付文を付けたものがある。本段階を代表するものとしては青根馬渡遺跡J1号住居址出土資料（第5図20・21）、同J2号住居址（第5図22～24）、青根上野田遺跡出土資料（第5図29～38）などがある。

（松田光太郎）

※注 前段階には充填縄文内に刺突を施したものがあり、列点充填の発生に何らかの関与をしたと思われる。



第5図 称名寺式土器 新段階補足図 (S=1/15)

参考文献

- 青木秀雄 1977 「称名寺式土器の再検討」『埼玉考古』第16号 埼玉考古学会
- 石井 寛 1990 「称名寺式土器に関する研究史」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 泉 拓良 1990 「関西地方の中期最終末土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 稻村晃嗣 1990 「加曾利E系列の土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 今井康博 1990 「勝田第6遺跡のJ1号住居址出土遺物」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号 日本考古学会
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第63巻第2号 日本考古学会
- 柿沼修平 1973 「いわゆる“称名寺土器”に関する二、三の疑義」『史館』1 市川ジャーナル
- 柿沼修平 1981 「称名寺式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 下村克彦 1973 「称名寺式土器の意匠二態」『埼玉考古』11 埼玉考古学会
- 下村克彦 1974 「大宮市北袋出土の称名寺式土器」『埼玉考古』12 埼玉考古学会
- 縄文時代研究プロジェクト 2002 「神奈川における縄文時代文化の変遷VI—中期後葉期加曾利E式土器文化期の様相その2 土器編年案ー」『研究紀要7かながわの考古学』財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帶の系統」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式」『縄文時代』第4号 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1995 「称名寺式の文様施文過程と伝統」『縄文時代』第6号 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1998 「称名寺式の文様変化と論理—称名寺式と堀之内1式の文様構造ー」『東海大学校地内遺跡調査団報告』8 東海大学校地内遺跡調査委員会
- 鈴木徳雄 1999 「関東地方 後期(称名寺式)」『縄文時代』第10号〔第1分冊〕 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1999 「称名寺式関沢類型の後裔—堀之内1式期における小仙塚類型群の形成ー」『縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論文集ー』縄文セミナーの会
- 谷井 彪 1977 「称名寺式土器の推移について」『埼玉県立博物館紀要』3 埼玉県立博物館
- 玉田芳英 1990 「中津式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 中島庄一 1981 「土器文様の変化—称名寺様式を中心としてー」『神奈川考古』第12号 神奈川考古同人会
- 中島庄一 1985 「縄文土器文様の研究—土器文様から見た称名寺様式期の遅延集団の構造ー」『東京考古』第3号 東京考古談話会
- 中島庄一 1989 「称名寺式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 平林 彰 1990 「中部高地の中期最終末及び後期初頭の土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 柳沢清一 1977 「称名寺式土器論(前編)」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1979 「称名寺式土器論(中編)」『古代』第65号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1979 「称名寺式土器論(続編)」『古代』第66号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1980 「称名寺式土器論(結編)」『古代』第68号 早稲田大学考古学会
- 山下勝年 1990 「東海地方」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 山下勝年 1990 「補考 東海地方西部地域における縄文中期末から後期初頭の様相」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 吉田 格 1960 「横浜市称名寺貝塚発掘調査報告」『東京都武蔵野郷土館調査報告書』第一冊 武蔵野文化協会
- 渡辺 務 1990 「横浜市松風台遺跡出土の称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター